

紙



ひ

と

こ

う

き



石井睦美





講談社文庫

皿と紙ひこうき

石井睦美

講談社

著者 | 石井睦美 神奈川県生まれ。『五月のはじめ、日曜日の朝』で毎日新聞小さな童話大賞と新美南吉児童文学賞を、駒井れん名義の『パスカルの恋』で朝日新人文学賞、絵本の翻訳『ジャックのあたらしいヨット』(BL出版)で産経児童出版文化賞の大賞、本書で日本児童文学者協会賞をそれぞれ受賞。著書に、『群青の空に薄荷の匂い——焼菓子の後に』(ポプラ文庫ピュアフル)、『キャベツ』(講談社文庫)、『愛しいひとにさよならを言う』(角川春樹事務所)、『都会のアリス』(岩崎書店)ほか。

さら かみ
皿と紙ひこうき

いし いむつみ
石井睦美

© Mutsumi Ishii 2014

2014年5月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277840-4



講談社文庫

皿と紙ひこうき

石井睦美

講談社

皿と紙ひこうき

闇^{やみ}のなかで目を覚ます。

恐竜^{きょうりゆう}の鳴き声が聞こえる。ぎーっ。鳴き声は長くゆるやかに続く。ぎーっ。近く

遠く仲間を呼んでいるのだ。呼ぶ声に^{こた}応える声。応える声は呼ぶ声になり、その声にまた応える声があがり、途絶^{とだ}えることがない。

ひと声鳴くたびに、恐竜はその重いからだを支えている四本の足のうちの前足のひとつ——それは右のときも左のときもある——を三十センチほどあげ、とんと一度地面を叩く^{たた}。鳴き声と地面を叩く動作は連動していて、だからそれは実際にはこんなふうに聞こえる。ぎーっ、とん。ぎーっ、とん。

太古から続くその声と足音を聞いてわたしは育った。

闇^{やみ}のなかでそれを聞いていると、わたし自身がもう百万年も生きていような気がする。ぎーつ、とん。一年。ぎーつ、とん。一万年。ぎーつ、とん。百万年。そんなふうに。

でも、現実^{じつ}は違う。わたしが生きた年数は十六年に満たないし、これから先どれほど長く生きたとしても、百年を超^こえることはない。

百年あとも、あの声は闇のなかに響^{ひび}き続^{つづ}けているのだ。

世界の始まりから終わりまでをつなぐ声。

かつて、どんなひとがその声を聞いただろう。わたしのとうさんが聞いた。じいちゃんも。そのまたじいちゃんも。

そのまたじいちゃんも、と言ったけれど、じいちゃんより前のひとたちには会ったことはない。ただ、古い写真がずらりと並んだ仏間^{ぶつま}で、まだ小さな子どもだったころ、会ったことのない、けれどわたしとつながりのあるひとたちのことを、ばあちゃんから教わった。

ぎーつ、とん。ぎーつ、とん。

あのときも恐竜は鳴いていた。足を踏んでいた。

恐竜は水を飲み、土だけを食む。それ以外は、どんな植物も動物も食べない。だれもがそれを知っている。子どもたちも。

恐竜の背中に乗って遊びたがる子どもたちはたくさんいた。揺れ動く恐竜の背中はかつこの遊び場になるだろう。けれど、おとなたちは口を揃えて言う。

「近づいちゃいけないよ。おまえなんか、ひと飲みばい」

「ひと飲み？　ひと飲みつて、なんね？　子どもば、食べると？」

食べられることはないを知っていて、子どもは聞く。

「食べんけど、臼は重か。つぶされたらおおごとばい」

「けがば、すると？」

「けがじゃすまん」

「死んでしまうと？」

「そうや。やけん、近づいちゃいけないばい」

恐竜に近づけるのはおとなたちだけ。それも、主に女たちだ。女たちが恐竜の面倒を見る。女たちには恐竜の機嫌のよしあしがわかるから。

大きくなったら、ばあちゃんやかあさんのように、恐竜きょうりゆうの世話ができるようになる。早く大きくならんといかん。小さかったわたしはそう思った。

「さよさんは若くして亡なくなったんよ」と、ばあちゃんは言った。「喜久雄きくおさんも長生きしんざらんかったねえ」とも言った。「気の毒やね。いまなら治るものの、昔は治らんかったことがようけあったきねえ」

写真を見るかぎり、わたしには、さよさんはおばあさんに見えたし、喜久雄さんはおじいさんに見えた。

死んでしまうと、みんなおじいさんとおばあさんになってしまふのだ。そう思ったら、なんだか恐ろおそしくなつて、わたしは泣き出してしまった。

「由香ゆか、どげんしたと？」

と、ばあちゃんが聞く。

「あんなあ、あんなあ」

考えていることを言葉にしようとするのに、それがうまくできなくて、またわたしは泣く。

「泣くことはないよ。なんも怖いことはなかと。ご先祖さまは、由香を守ってくんしやるき」

「うん」

「さ、ちよこつとお昼寝しようかねえ。いい子はお昼寝ばせんと」

「うん」

夏の昼下がりに。仏間はひんやりと涼しく、お線香の匂いがしみついていて。その部屋に、蟬と恐竜の鳴き声が入り込んでくる。短い命を惜しむようにじれて鳴く蟬の声と終わることのない命を刻む恐竜のゆるやかで長い声。

部屋の隅に重ねられている夏座布団には、かさかさとした手触りの真新しい麻のカーバがかけられている。ばあちゃんはそれを二枚ずつ取って畳の上に並べて敷き、お昼寝用に即席の寝床を作る。

「さ、由香も横になりよ」

手本を見せるように、ばあちゃんが横になる。

わたしが寝転ぶと、ばあちゃんは、わたしとじぶんのおなかの上にタオルケットをかけてくれた。

「ばあちゃん」

「なんね？」

「恐竜きょうりゆうが鳴いとう」

「恐竜？」

「ほら、ぎーつ、とん、ぎーつ、とん、て」

「ああ、臼うすのことかね？ 由香にはあれが恐竜の鳴き声に聞こえるの？」

「うん。ばあちゃんには聞こえん？」

「そうやねえ。恐竜ち、思ったことはなかったばい」

「じゃあ、ばあちゃんにはなんに聞こえるの？」

「そうやねえ」

「ばあちゃんはまたそう言うだまと黙った。

「そうやねえ」

同じ言葉をばあちゃんは繰り返すかえ。なにに聞こえるのか考えているのだ。でも、答えるより早く、かすかでやすらかな寝息ねいきが聞こえだし、わたしは、ばあちゃんが、答えより、わたしより、先に眠ねむってしまったことに気づく。

「ばあちゃん」

小さく呼んでも返事はない。

ばあちゃんの寝息ねいきがいちばん近い物音になり、蟬せみと恐竜きょうりゆうの鳴き声は静けさを際立きわだたせ、わたしは退屈たいくつで、昼の時間がひゆるひゆるとのびていくように感じた。

それでもいつのまにかわたしも眠ねむつてしまう。

目が覚めると、隣となりにばあちゃんはいなくて、座布団ざぶとんだけがそのままになっている。その上にたたまれたタオルケットが置いてある。

真つ暗な闇やみのなかで恐竜が鳴く声を聞いていたら、そのことを思い出した。恐竜の声がばあちゃんにはなにに聞こえるか、そういうばまだ答えをもらってなかったことも。一度、聞いてみようかと思う。

「臼うすは臼うすやき」

ばあちゃんはそう言うだろうか。

「なんやつまらん」

ふくれてわたしがそう言うのと、ばあちゃんはおかしそうに笑ってこう言うのだ。

「白^{うす}がなにを言うていなさるかなら、ようわかつとう。土^くば砕くのが楽しくてならんのか、苦しゅうなつてきとうのか。そげんなら、どげんしてほしいんか、ばあちゃんにはようわかると」

「わたしにはわからん」

「いまにわかるようになるばい」

「ならんでもよか。ならんでも困らんき」

わたしはそう言い張るだろう。

ばあちゃんはそれを聞いてさびしそうな顔をする。

暗闇^{くらやみ}のなかにばあちゃんの顔が浮^うかぶ。大好きなばあちゃんの顔が。

大きくなったら、ばあちゃんやかあさんのように恐^き竜^{りゆう}の世話をしたいと、子どもだつたころそう思つたことを忘れたわけではない。

でも、いまはよくわからない。恐竜やこの家やこの村に——つまりここに縛^{しば}られたくないと思うようにもなつた。

それでも。

ぎーっ、とん。ぎーっ、とん。

あの鳴き声は好きだ。

あの声が聞こえなければさびしいだろう。さびしいばかりではなく、不安にもなるだろう。

あの声が聞こえるから、闇やみのなかでふいに目を覚まして、どんなに寝ねぼけていても、ここがどこだかわかるのだ。わたしがだれかも。

そんなとき、やつぱりわたしはどこにも行かん、とも思う。

別のあるとき、ばあちゃんはこんなことも言った。

「作治さくじさんは、じいちゃんにほんなごつよう似とらつしやる」

「作治さんて？」

わたしは聞く。

「じいちゃんのおとうさん、おまえのひいじいちゃんたい」

そう言つて、ばあちゃんはさつき指さした写真をもう一度さしてわたしに教えた。

「わたしのひいじいちゃん」

仏壇ぶつだんのすぐ上に、作治さんの写真は飾かざられていた。じいちゃんによく似た顔をした

おじいさんが写っている。

「ほんなごつ」

と、わたしは強くうなづく。

じいちゃんに似ている作治さんは、ほかのひとよりずっと親しみが持てた。それでも、写真をじつと見続けていると、少しだけ怖い気持ち^{こわ}が忍^{しの}び込^こんできた。

いまはもう、ひとりで仏間^{ぶつま}にはいつても、どれだけ長くご先祖さまの写真を眺^{なが}めていても、怖いと泣くことはない。若くして死んだというひとたちの顔に残る若さもわかるようになった。もうお昼寝^{ひるね}もしない。夜はぐっすり眠^{ねむ}る。

わたしはもう学校にあがる前の小さな子どもではない。この春、高校生になった。毎日、山間^{やまあい}のこの集落^{ふもと}から麓^{ふもと}の町にある高校まで通っている。学校へはバスで行く。

バス通学は小学生のときからで、小学校入学以来ずっと、七時二十分発のバスに乗っている。小学校は二十分下ったところにあつて、小学生はそこで下車する。中学からは終点まで。終点までは五十分かかる。幼稚園^{ようちえん}は小学校の近くで、幼稚園のときは、かあさんに車で送り迎^{むか}えをしてもらった。